

最近の症例から (3) ——悪性リンパ腫——

井口光世, 氣賀昌彦, 古澤清文

松本歯科大学 口腔外科学第二講座 (主任 山岡 稔 教授)

患者: 82歳, 女性

初診: 昭和63年1月6日

主訴: 右側上顎臼歯部歯肉の腫脹

家族歴: 特記事項なし

既往歴: 昭和62年6月頃右側鎖骨下の腫脹を認め, 増大傾向が認められたため某総合病院を受診, 試験切除術を施行され悪性リンパ腫の診断を得た, 直ちに入院し化学療法を受け約2ヶ月後症状の消退を認め退院した。

現病歴: 昭和62年12月初旬, 3] の動揺を認め某開業医を受診し歯周炎の診断にて抜歯した。その後同部の腫脹が出現し, 増大傾向を認めたため紹介にて当科を受診した。

現症

全身所見: 体格中等度, 栄養状態良好にて他に特記すべき事項なし。

局所所見: 右側鼻唇溝部にび慢性の腫脹を認め顔貌は左右非対称性。顎下リンパ節は左右共に大豆大1個触知, いずれも可動性で圧痛は認められなかった。右側浅顎リンパ節は拇指頭大1個触知し, 非可動性で圧痛を認めた。

口腔内所見としては, 右側上顎小臼歯部歯肉に20×30 mmの滑沢な腫瘤を認めた。表面は一部潰瘍が形成され潰瘍部は噴火口状に, 灰白暗赤色, 毛細血管拡張, 顆粒状を呈し, 腫瘤は弾性硬で, 圧縮性や退色性はなく, 無痛性であった。また圧迫により出血, 排膿などはなく骨とは可動性であった (写真1)。

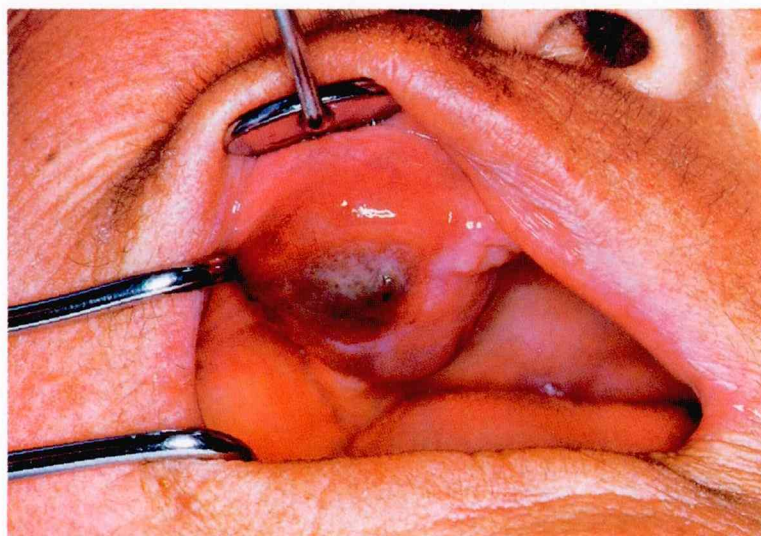


写真1

X線所見：右側上顎前歯部より小臼歯部にかけ、歯槽突起部に骨吸収像を認める(写真2)。

臨床検査所見：血液一般検査にて軽度の貧血、血

沈値の亢進、桿状核球の増加、リンパ球の減少を示していた(表1)。

臨床診断名：悪性リンパ腫

表1：初診時臨床検査成績

(血液一般)	
白血球数	$81 \times 10^2 / \mu l$
赤血球数	$339 \times 10^4 / \mu l$
血色素量	15.2 g/dl
ヘマトクリット値	35.4%
血小板数	$37.2 \times 10^4 / \mu l$
血沈値	65 mm/hr
白血球分画	
Stab.	14%
Seg.	71%
Eosino.	0%
Baso.	0%
Mono.	1%
Lympho.	14%



写真2